

母の705 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

子どものそばにある短歌⑩／千葉聡 2

作家と画家がであうとき⑤／中川ひろたか 3

子どもと楽しむ春の植物観察／鈴木純 4

『ホッキョクグマのブック』刊行記念インタビュー／あずみ虫 6

新刊紹介／青木伸生

イラスト／ザ・キャビンカンパニー



「還暦」を迎えました！

新沢としひこ

誕生日を迎えて60歳、還暦となった。十干十二支を一巡し、もとの暦に還るということで還暦。60年で人生ひと巡り、もう一度生まれ変わって赤ちゃんから出直すので、赤いチャンチャンコを着ると言う。それはなんと素晴らしい考えなのだろう。

時の流れは一方通行なので、直線的にどんどん進んで行ってしまうものだ。還暦という考えがなければ、60歳はただの通過点でしかなく、どんどん年を取っていくだけだ。けれどひと回りして元のところに戻ってくる円のように見ると、新しい始まりのような気がしてくる。生物学的には別にリセットされる訳では無いけれども、考え方ひとつで、いろいろと前向きにとらえることが出来て、それも人間の知恵なのかもしれない。

60歳というのがとても良い。しっかり年月を生きていたという感じがするけれど、まだ体力はあるし、新しいことも始められるかもしれないという絶妙なところ。ひと巡りして赤ちゃんに戻るならここしか無いかも。

同級生と会うと、定年の話、病気の話、親の介護の話、と愚痴ばかりになりがちだ。いつまでも若くは無いんだよねあと思わされることも多い。若い人たちが活躍していくのは当たり前だし、そうでなくては困る。いつまでも今のポジションにしがみついているのも、みっともない。

そこで爽やかに、人生2巡目ということで、新鮮な心もちで新しくスタートしていく。年寄りとしてはまだ初心者で赤ちゃんみたいなものですよ、ということでもある。そうか自分は、おじいちゃん1年生！ そう思うと楽しいかも。

僕は子どもたちが歌う歌をずっと作ってきた。そして今も新しい歌を作り続けている。今どきの子どもたちの持っている感覚が良くわからないと思うこともある。けれど、人間の命が育ち、巡っていくことは、大昔から基本的に何も変わっていないはずだ。その中で、今自分が思うこと、感じることを素直に書いていき、それが人間の原則にさからっていないければ、きっと今の子どもたちにも伝わると僕は信じている。

どんな大人の中にも、子どもだった小さな自分がいて、その子どもが感じたことは必ず真実と僕は思って、子どもの歌を作っている。その自分の中の小さな子どもにスポットをあてて、もう一度主役にすることを「還暦」と呼ぶのかもしれない。

赤ちゃんになって2巡目の人生を歩み始めた僕は、これから、どんな歌を作るのだろうと、ちょっとワクワクしている今日この頃。

(しんざわ としひこ／シンガーソングライター)

子どものそばに
ある短歌

10

ペンケースはきらきら 千葉聡

水に溶けそうな想いを綴るにはライトブルーのこのペンがいい

柴田瞳『月は燃え出しそうなオレンジ』

いつもは胸ポケットにペンを一本さしておくのに、今日は忘れてしまいました。出席簿に、出欠記録を書くころと思ったら、「あれ？ ない！」

僕が困っていると、中学生たちは「どうぞ」とボールペンを差し出してくれました。どの手にも、それぞれの、色とりどりのボールペン。

「ありがとう」

僕はいちばん近くにいた子からペンを借り、他の子にもお礼を言いました。

「このペン、きれいな緑色だね。でも、インクは緑じゃなくて、黒なんだ」

「先生、今は、ペンの本体も、インクの色も、好きなように組み合わせられるんですよ」

生徒たちは、ペンケースを開いて見せてくれました。その中身は、カラフルなお菓子の詰め合わせのようです。

「へー。おしゃれだなあ」

「そのときの気分で、使うペンを選ぶんです」

ペンケースのなかで出番を待つペンたちは、きらきらしていました。まるで持ち主に笑いかけるように。

ちば さとし 1968年生まれ。歌人・高校教諭。著書に『短歌は最強アイテム』（岩波ジュニア新書）、『グラウンドを駆けるモーツァルト』（角川書店）などがある。

拜啓 村上康成様

「ピーマン村」のはじまり

中川ひろたか

村上さんにはじめて会ったときのこと、覚えてる？

一九九四年一月。クレヨンハウス主催の「名人道場」という一泊二日でやる「お泊まりセミナー」。講師は、斉藤洋、村上康成と、我らがバンド「トラヤ帽子店」。磐梯グランドホテル。そこで、出会った。

実は、その三年ほど前に『はんたいホラネー』という歌をベネッセの「こどもちゃれんじ」に発表して、そのイラストを描いてくれたのが村上さんだった。そのイラストは、とても秀逸で、村上さんもお気に入りの一枚だった。

ぼくは、当時「こどもちゃれんじ」の付録のカセットを作る仕事をしていた。その録音スタジオに編集者が本誌を持ってやってきた。見せてもらうと、八見開きの「おはなし」コーナーがあった。それを見て「これ、おれに書かせてみない？」っ

作家と画家が であうとき ⑤ 『さつまのおいも』

中川ひろたか・文／村上康成・絵
1995年6月刊行



て言った。生まれてこの方、お話なんてものは一つも書いたことがないのにだ。そしたら、一カ月もたないうちにその編集者から電話が来る。

「おはなしを書いてほしい」って。テーマは「いもほりえんそく」。なかなかできずに苦労したが、一週間くらいしてファックスを送ると「おもしろい」という返事。「じゃ、絵描きさんはどなたに？」って聞かれて、ベネッセでイラスト描いてたし、村上康成はどうかと言ったら、即決。

しばらくして、ベネッセ版ができあがる。それが、いい感じなので、ベネッセに単行本にしてほしいって言うと、ベネッセは当時、絵本から撤退するとの答えだった。

それを聞いた村上さんは「じつは、童心社で来年、一冊描かなきゃいけないから、これ推してみよう」って言った。

で、童心社の千々松さんっていう名物編集者に見せたら大絶賛。こんな絵本を待っていたと。

そうやってできたのが『さつまのおいも』。「ピーマン村の絵本たち」シリーズの誕生です。

ちなみに「ピーマン」は、ぼくのあだ名。「村」は、村上の村。中川ひろたか、栄えある、最初の絵本です。

さて今年、久方ぶりの「ピーマン村」の絵本ができますよね。ハロウィンの話。これ、きつと、二人の最高傑作になるんじゃないかな。どうぞ、よろしくね。

(ながわひろたか／絵本作家・シンガーソングライター)

六年前に、まち専門の植物ガイドになつてから、様々な場所で植物観察会を行ってきました。私の主なフィールドは、駅前ロータリーや普通のアスファルトの道路沿いです。わざわざ野山に行かなくても、どんなところでだって、その気になれば植物は見つかります。日常生活の延長線上で植物をたのしむ人が増えてほしい。そんな思いで活動をしています。

さて、そんな私によく寄せられる質問のひとつに「子どもが植物好きになるにはどうしたらいいですか？」というものがあります。なかなか難しい質問ですが、そろそろ四歳になる娘の様子を見ていて、もしかしたらこんなことは言えるかな、と思うようになったことがあります。今回はそんな話を書かせてください。

娘が植物を見分けるようになったのは二歳五カ月頃のこと。季節は夏で、街なかにはサルスベリやオシロイバナ、フユウなど、ピンク色の花がよく咲いていました。ちょうど娘がピンク色を大好きな時期だったので、これらの花をことあるごとに観察していたところ、娘は驚くほどあっさり、この三種を見分けられるようになりました。この間、私からは花の形を説明するようなことは一切しておらず、ただ花を見て、その名前を言っていただけでした。二歳五カ月の子どもに

は、すでに自分で形のちがいを見分ける能力があるのだということを、私はこの時に知りました。

娘が植物を覚えていく過程を観察していると、植物の識別には、「あの形」と「この形」は似ているけれどちがつたという積み重ねが必要なのだと思うようになりました。たとえば私の印象に強く残っているのは、娘が三歳四カ月の時の出来事です。ムラサキツメクサの花の蜜を吸つことを覚えた娘が、続いて庭のセ

子どもと楽しむ 春の植物観察



センニチコウを見て、なにかを発見した娘

【ハクモクレン】

●たのしみ

方角をはかってみよう！

花のつぼみが、みんなそろって北側を向く面白い動きをします。

●かたち

白い花の形が、
ちょっとチューリップみたい？



(左) 葉っぱが出るよりも先に花が咲く
(右) なぜか、つぼみが北を向く

鈴木純 (すずき・じゅん)

植物観察家、植物生態写真家。1986年東京都生まれ。東京農業大学で造園学を学んだのち、中国で2年間砂漠緑化活動に従事。帰国後、日本各地に残る自然を訪ね歩き、2018年にフリーの植物ガイドとして独立。観察会を中心に、保育の現場や地域おこし、企業のSDGsへの取り組みの協力など幅広く活動している。著書に『そんなふうに生きていたのね まちの植物のせかい』（雷鳥社）などがある。

ひそかに咲く
黄色い花



こんなことから、私はいま、娘と植物を楽しむ時に、まず「楽しむこと」と、そして「形のちがいを考えること」の二点を大切にしています。センニチコウのエピソードひとつとっても、娘はまずムラサキツメクサの蜜を

「蜜吸えないもん。こっ、痛いよ」と、花の部分の蜜を吸っていました。たしかにムラサキツメクサとセンニチコウは雰囲気似ているものの、センニチコウの方はトゲトゲしていて、触るとすこしチクツクします。つまりこの時、娘は「この二つは似ているけれど、種類がちがう」ということを発見したのです。

そして、続いて娘はセンニチコウの花をのぞき込むように見て「ここに黄色いやつあるよ、なんでー？」と聞いてきました。指さす先を見ると、そこには小さな星形のもので、大人でも知らない人の方が多いかもしれません。じつはそれこそがセンニチコウの花なのです。三歳児の観察眼はここまですごいのかと、子どもに対する認識を改めることになった出来事でした。

吸うという「楽しみ」を見つけ、そこに生まれた愛着が、ムラサキツメクサとセンニチコウの「形のちがい」という発見につながり、それによってこの二種を見分けられるようになったのだと思われるからです。

ということで、最後に、私が実感しているこの方法で楽しめる春の植物をご紹介します。とはいえ、人と植物の関係は様々で、そのアプローチ方法に正解があるわけではありませんので、あくまで一例としてお読みください。そして、そもそもこの話として、なによりもまず大人自身が植物を楽しんでいることがとても大切なことだと思います。ぜひ保護者のみなさんから積極的に楽しんでみてくださーい！



(上) ムラサキツメクサ



(右) センニチコウ

春の植物を楽しもう！

【カタバミ】

●たのしみ

10円玉を磨いてみよう！

葉っぱを何枚かにとって、10円玉にこすりつけるとピカピカに！

●かたち

葉っぱがハート形をしています。

よく似たシロツメクサ（クローバー）は丸形なので、見比べてみてください。



(左) ハートの葉っぱが3枚セットのカタバミ
(右) 丸い葉っぱのシロツメクサ

【キュウリグサ】

●たのしみ

においを嗅いでみよう！

葉っぱを指でもんで嗅ぐと、なんとキュウリの匂いがします。

●かたち

葉っぱがスプーン形をしています。

春のはじまりは、スプーンが放射状に広がる独特の姿で生きています。



(左) スプーン形の葉っぱが放射状に広がる
(右) 花茎がのびた先には、こんなにかわいい花が！

【ヤエムグラ】

●たのしみ

服にくっつけてみよう！

茎と葉っぱにびっしりついた細かい毛で、服にペタッとくっつきます。



簡単に服にくっつく

●かたち

茎の1カ所から放射状に葉っぱが出る姿が特徴的です。



葉っぱの出方が特徴的

二 十年以上前から星野道夫さんの野生動物の写真やエッセイなどの文章を通して、アラスカの厳しい自然環境の中でひたむきに生きる動物たちの姿に魅せられてきました。

絵本の仕事をするようになり、自分でも野生動物たちの絵本を描いてみたいなと思ったのです。これまでのように写真を見て描くのではなく、実際にアラスカに行つて、自分の目で見て体験したいと思うようになりました。それで思い切つて、アラスカに行く計画を立てたのです。

はじめてアラスカに行った際、運良くホッキョクグマを観察するツアーへの誘いを受けました。通常、ホッキョクグマを見るツアーでは、車の中からの観察ですが、そのツアーは徒歩での観察ができました。ガラス越しの単なる観察ではなく、野生のホッキョクグマと同じ空間を共有し、ちゃんと接することができました。それは私にとって、ありがたくとても大きな体験でした。

そこで出会ったホッキョクグマの親子がいます。子グマがお母さんに甘えて口をぺろぺろなめている姿や、一緒にお昼寝をしている姿など、いろいろな姿を見せてくれました。子グマは本当にお母さんが大好きなんだなと感じましたし、その姿がとても愛らしかったので、このホッキョクグマの親子の絵本を作り



取材中のあずみ虫さん

『ホッキョクグマのブック』 刊行記念インタビュー

あずみ虫

2018年より、アラスカに拠点を移し、作家活動をしているあずみ虫さん。

現地の野生動物を観察取材して描かれた物語絵本

『ホッキョクグマのブック』が刊行となりました。

制作の経緯や、本作に込めた思いを伺いました。

たい！と思ったのです。

アラスカにはじめて行った四年前に見たオーロラが強く印象に残っています。外に出ると空の端の方が妙に発光してきたのです。

光はそのうち端から中心へと集まって強くなっていき、端からはカーテンのような光があらわれて、また巨人の手を思わせるような光もあらわれました。とても怖く、美しくもあり、宇宙を感じるような、昼間の世界とは次元が違つような、本当に不思議な体験でした。この絵本でオーロラの場合で「そらが おどっている」という言葉が出てきますが、初めて私がオーロラを見たときに浮かんだ言葉なのです。

やはり実際に体験してみることが大切ですね。このオーロラの場合は、自分でもとても思い入れのある絵になりました。



ホッキョクグマのブック

あずみ虫／作
定価1650円（本体価格1500円＋税10%）



★インタビュー全文はこちらからご覧いただけます。
<https://www.doshinsha.co.jp/news/detail.php?id=2870>

助数詞の使い分けは、日本人の繊細さから

青木伸生



日本語の数えかた図鑑

青木伸生／監修
定価4730円
(本体4300円+税10%)

かつてジブリの映画『千と千尋の神隠し』を観たときに、相手の名前を知ることが、相手の存在を認識することなのだと実感しました。逆に考えると、自分の名前を知ることが、自分自身の存在を確かめることだといえます。私は小学校の教員をしているので、子どもの名前を覚え、名前と呼ぶことの大切さをあらためて感じた映画でした。

『日本語の数えかた図鑑』は、日本人がいろいろなものをどのように数えてきたかを整理して掲載している図鑑です。数えるときに、数字の後に付ける言葉を「助数詞」と言いますが、日本語には、実に多くの助数詞があることが分かります。助数詞を付けるには、数える対象のことをよく知り、そのものの特徴をとらえることが必要です。日本人は、身のまわりのものに対して、とても細やかに認識し言葉として表現してきたことが、助数詞の数の多さからもわかります。

植物のことを例にして考えてみましょう。庭に植えてある木は、1本、2本と数えます。しかし、植物が鉢植えになっていたら、1鉢と数えるように、助数詞が変わります。花は1輪ですが、花びらになると1枚とか、ひとひら（1片）と言うようになります。藤の花のように、まとまっていて垂れ下がっている花は、1房と数えます。草花の1つ1つは1本ですが、複数の花を枝や茎から切って束ねると1束になります。植物でも、形や様子、状態によって細やかに数え方を使い分けしていることに気づきます。こうした使い分けを、この図鑑であらためて実感することができるのです。

また、普段の生活の中ではあまり使われなくなった助数詞での数え方を知ることでもあります。包丁やはさみなどの道具は、今では1つとか1本などと数えますが、もともとは1挺^{ちよう}と数えていました。バイオリンや三味線なども1挺と数え、さらには習字で使う墨やろうそくも1挺と数えるのだそうです。この図鑑を読むと、「へえ、そうなんだ」と思う言葉がいろいろ出てきます。

コラムも充実していて、「チョウを1頭と数えるのはなぜか」「人の年齢の数え方のいろいろ」なども豆知識として知ることができます。

巻末には「数え方ワークシート」が付いているので、自分がどれぐらい数え方を知っているか、また、この図鑑を通して身につけることができたかを確かめることもできます。

この図鑑を手にして、いろいろなものの数え方を知り、それを通して日本人の繊細な心遣いにふれていただければ幸いです。

(あおき のぶお／筑波大学附属小学校教諭)

2月の新刊図書！

単行本図書

がっこうかっぱの 生まれた日

山本悦子／作
市居みか／絵

定価1320円（本体1200円+税10%）



学校はいいところだ。子どもたちの笑い声があふれてる。おれが〈がっこうかっぱ〉になったわけは、ある女の子と約束したからさ。

とことこえほん

ちょきちょき

中新井純子／作・絵

定価1100円（本体1000円+税10%）



ちょっくん ちょき ちょき……きよろ、げろ、わん、ちょろん！ 紙をきったら何かになるよ。ページをめくると、何に見えるかな……？

読者の声

童心社のおはなしえほん
まいこのモリーと
こつもりのかさ

こまつぶひさ／文 はたこうしろう／絵
定価1430円（本体1300円+税10%）



年中の息子が描いた絵が作品展に出品されることになりました。描いた絵は『まいこのモリーとわにかばん』です。記念になると思い、絵本を買いに行くと、とりに『まいこのモリーとこつもりのかさ』も見つけ、絵のかわいさにひかれて、二冊購入させていただきました。はたこうしろうさんの絵の表情がとってもかわいく、読んでいて楽しかったです。これからも楽しみにしています。
（京都府 R・I）

おいしいともたち
みかんくんがね…

とよたかずひこ／さく・え
定価935円（本体850円+税10%）



ある日のお昼寝後、突然息子が「しんぱいごむよう！」と手を挙げ、それを何度か繰り返しました。それまで私はこの絵本のシリーズを知らなかったのですが、保育園の先生に聞くと、園で読みかかせしていたとのこと。嬉しくて本屋さんで買いました！ これまで車の絵本にしか興味を示さなかった息子が、にこにこ嬉しそうにきいてくれます。
（宮城県 Y・M 三五歳）

単行本絵本
うまれてきてくれて
ありがとう

にしもよう／ぶん 黒井健／え
定価1430円（本体1300円+税10%）



私は幼稚園の先生でもあり、一才になった娘を持つ母でもあります。この本にであったのは、私が担任した子のお母さんから、お腹に赤ちゃんがいることをどう伝えたらよいか、生まれてくる赤ちゃんが仲良くしてもらおうにはどうしたらよいかと相談されたことがきっかけでした。まだ字を読めない男の子でしたが、絵を見て指をさしたり、ふいに「赤ちゃん」と言ったりすることが増え、そのお母さんから感謝されました。この絵本はお母さんになろうとしている人にももちろん、生きているすべての人の心に温かい光を差して、温かな気持ちになれる絵本だと思いました。
（福島県 M・I 三〇歳）



イラスト／ザ・キャビンカンパニー

2023年2月15日発行（毎月刊）
母のひろば 第705号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本梓 ロゴ：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●2/22は猫の日です。語呂合わせという点では季節の行事も似たようなもので、節分に豆を撒くのは「魔を滅する」に繋がるからだそうです。恵方巻きは歳神の方向を向いて食べますが、大勢に大口を開けられ太巻きを貪り食われて、歳神様は嬉しいのでしょうか？ まあ、そんな慣わしを営々と守り続けている人間が、いじらしいようにも思えますが。◎

●4年前に、アラスカより戻られたばかりのあずみ虫さんから、現地で見てきた動物たちの話を伺いました。興奮冷めやらぬ表情で熱く語られている姿は、今でもはっきりと思い出せます。単身アラスカに乗り込み、現地の空気を肌で感じながら描かれた絵には、真に迫るものがあります。『ホッキョクグマのブック』、ぜひお手にとってご覧下さい。㊟